

ラブレター

津木林洋

「メールじゃダメなの？」

「俺はお前が手で書いてくれたラブレターが欲しいんだ。そしたらさ、お前が有名になった時、自慢できるだろ」

ルックスもスタイルもいい、スポーツは万能、頭が悪いのは仕方がないとしても、あたしが有名になった時、この子の写真が出てきても、皆はそうがっかりはしないだろう。

「分かった。一回だけよ」

「やったあ」

百円ショップで買った薄いピンクの封筒とハートマークの透かしが入った便箋。

文章は彼に誤解を与えないために形式張ったものにしようと思った。しかしいつかテレビで披露された時には心が籠もっていると思われる文章がいい。

彼女は時間を掛けてラブレターを書いた。

最後に、口紅を塗って彼の名前の下に唇を押しつけた。大好きな女優の真似だった。

司会者から手紙を見せられた時、彼女はそれが自分の書いたものとは思えなかった。丸文字に堅苦しい文面がまるで合っていない。しかし自分の名前があり、宛名の下には色あせたキスマークが付いている。

その時ゲストとして一人の男がスタジオに入ってきた。その顔を見て彼女はすべてを思い出した。瞬間、吐き捨てたい気持ちになった。男が平凡な姿に成り下がっているのもうんざりだったが、子供の頃から変わっていない自分の姿を見せつけられたことが堪らなかったのだ。タイムマシンがあれば絶対ポストに入れる前に取り上げてやるのに。

彼女はにこやかに笑いながら、テレビ映りを考えて男を軽く抱いた。